

東京大学 景観研究室 研究概要

東京大学 景観研究室

はじめに

前年度

平野のスポーツ民宿

湖畔景観

山中地区の集落構造

の3点に着目し、

「山中湖村における湖畔景観の変遷と暮らしの変容
一土地所有形態に着目してー」

高橋朋子

「学生向け合宿地としての観光地の成立過程とその後の変遷
一山中湖村平野地区を対象としてー」

柴田賛祐

「山中湖村山中地区的集落構造の変容過程
一街路網と集落範囲と生業に着目してー」

山崎明日香
を発表した。



今年度

まちづくりを行って行く際には、どのように人々の生活が営まれ、その中でどのようにインフラが使われて来たのかを理解することが必要である。

今年度は、景観研究室の活動として、

山中地区のたて道 長池の街路

の2点に着目して研究を行った。



6月～

文献調査（山中湖村史など）
たて道ワークショップ準備

7月 10 日

現地調査
たて道 18 号と 39 号のワークショップ

7月～8月

たて道模型づくり

10月

長池地区・山中地区でのヒアリング
現地調査・ヒアリング調査

12～3月

論文執筆・追加調査・どんど焼きへ参加



方法

文献調査

古地図

村史、山中湖周辺の民俗・生業（吉田チエ子）

古地図

高村正勝所蔵 高村五兵衛門関係文書（高村昭秀氏提供）



中野村山中全図（高村不二義氏提供）
中野村地図宝典（羽田源六氏提供）

地図

甲斐国全図

ゼンリン住宅地図

航空写真

治水地形分類図

植生調査情報提供

村提供資料

土地登記簿

集成図

（災害復旧関係）昭和 26 年雪しろ灾害

公図（長池集落範囲）

その他文献 天野時男氏所有資料 等

提供して頂いた古写真 提供して頂いた古地図



ヒアリング調査

内容：

山中地区：道の利用、現在道に現れている要素の設置経緯について。

長池地区：文献では分からぬ、暮らしや言い伝えについて。

協力者：住民の方々 計 24 名

※補足で電話でのヒアリングにもご協力いただいた。

2014/10/3	1名	2014/11/16	2名
2014/10/16	1名	2014/11/18	3名
2014/10/17	1名	2014/11/19	4名
2014/10/18	1名	2014/12/26	1名
2014/10/19	3名	2015/1/28	5名
2014/11/14	3名	2015/2/13	3名
2014/11/15	2名	2015/3/4	2名

計 32 回



調査の様子



中山地区 たて道の多様化の過程

-集落の変容と生業に着目して-

東京大学 景観研究室 学部4年 小粥慶子

さまざまな顔を見せるたて道

多様な機能と様相をもつたて道



中山地区たて道
ゼンリン地図を基に筆者作成



祭りの御輿ルートとして使われるたて道（明神通り）



古くからの石垣が残るたて道（40号）



住民によりこまめに手入れされるたて道（25号）



小学生の通学路として使われるたて道（44号）



古くからの蔵が残るたて道（39号）

本研究の目的

一見同じように見えるたて道だが、集落の変容によってその利用のされ方は変化している。さらに、生業の変化や、中山地区の人々の生活のあり方がたて道の多様性を生み出している。

本研究では、たて道の多様性が生まれた過程を明らかにすることを目的としている。

集落変化

生業の変化

中山地区の人々の生活

たて道の多様性

段階的に生じるたて道の多様性

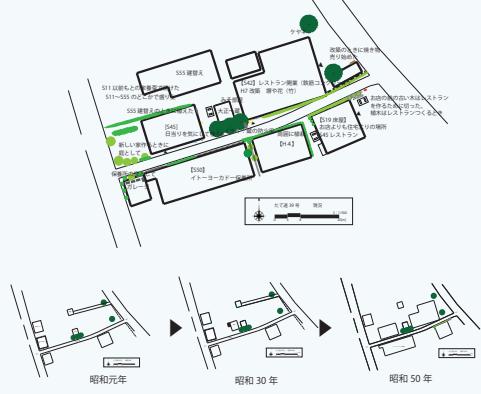
研究対象のたて道 各たて道の現状整理、各時代ごとの変遷

例	ブロック塀	低木	物置
■■■■■	フェンス	高木	ガスボンベ
■■■■■	木の垣	昭和30年以前に植えられた木	室外機
□	建物物	入口	水道
●	車	ガスボンベ	ポスト
◆◆◆◆◆	建物物	物置	瓶ケース

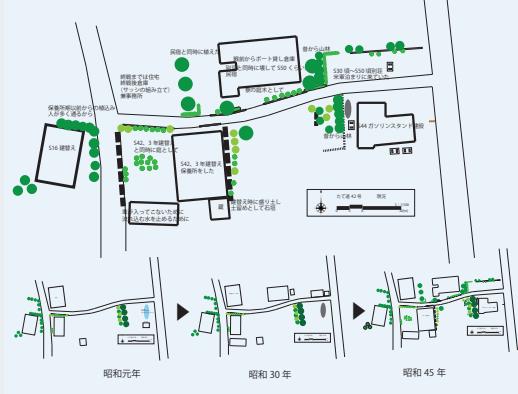
44号



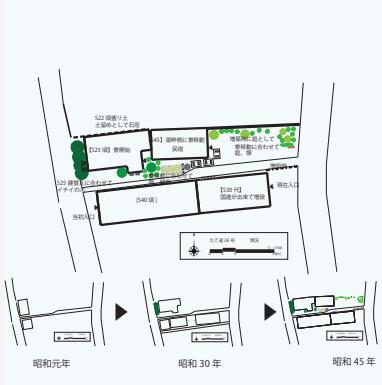
39号



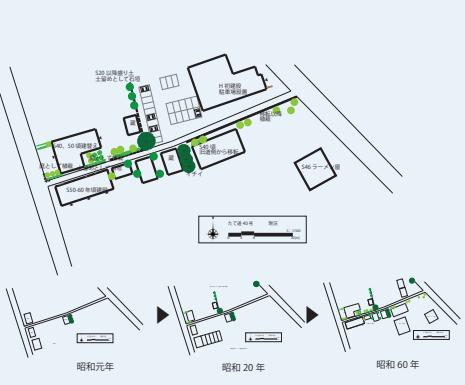
42号



38号



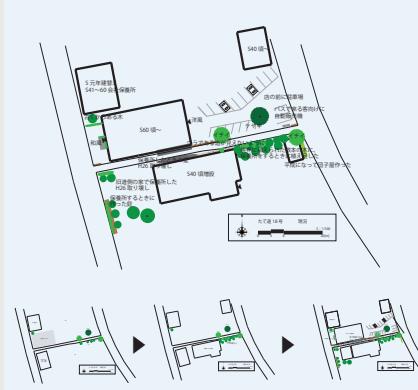
40号



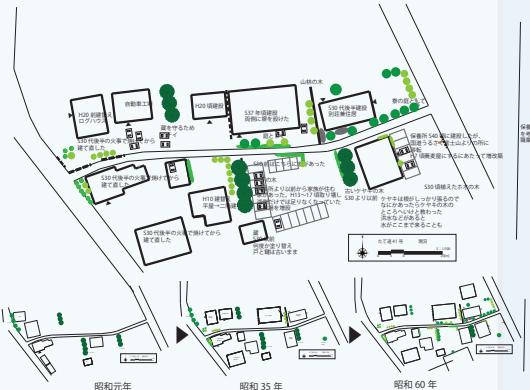
43号



18号



41号



25号



街路の変遷とたて道の利用の変化

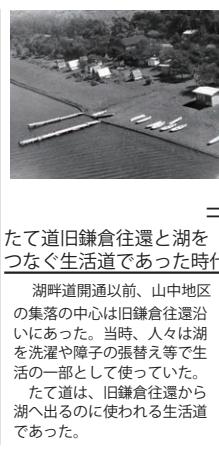
▶たて道は、湖畔道開通に伴い使われ方を変化しながらも、変わらず山中地区の人々に使われ続けている。



山中地区的街路網



湖畔道開通以前の集落とたて道（昭和2年）



たて道旧鎌倉往還と湖をつなぐ生活道であった時代
湖畔道開通以前、山中地区の集落の中心は旧鎌倉往還沿いにあった。当時、人々は湖を洗濯や障子の張替え等で生活の一部として使っていた。たて道は、旧鎌倉往還から湖へ出るのに使われる生活道であった。



湖畔道開通後の集落とたて道（昭和50年）

たて道が生活と生業の場を結ぶ道となった時代

湖畔道開通後、山中地区の人々は、旧鎌倉往還沿いに生活の場を残したまま、湖畔道側に店舗を出すようになった。これにより、湖畔道側が生業の中心となった。

たて道は、生活の中心である旧鎌倉往還と生業の中心である湖畔道路をつなぐ道となった。

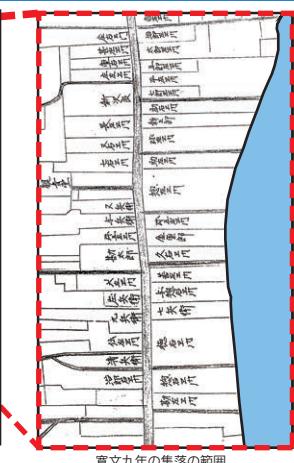
集落の始まりと雪代灾害

雪代：富士山の雪解けによる土砂災害

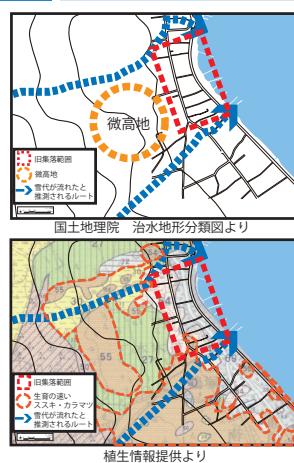
▶たて道を、山中地区の集落の変遷の履歴として捉えることができる。



雪代が流れたたて道



寛文九年の集落の範囲



微地形図による分析

旧集落の範囲は雪代の流れ道を避けるように立地したという言葉を受け、微地形図を見てみると、実際に寛文九年の集落範囲は山側が小高くなっていることから、雪代が避けられる範囲となっていることが分かった。



現在も残る雪代よけの石垣

山中湖村における雪代灾害記録

昭和26年	たて道37号付近
昭和34年2月20日	一ノ橋 村道橋付近
昭和45年	一ノ堀
昭和52	旭日丘

村の記録に残る雪代灾害は以下の通りであるが、ヒアリングからは年に一度以上の頻度で起こっていたことが伺える。

昭和26年の雪代災害を受けて、村では水路や農道の整備を行った。これ以後は集落内に雪代灾害が襲ったという記録は見られないが、上記の新聞記事に見られるように、水路の水が溢れ、道路が浸水することはそれ以降も続いた。

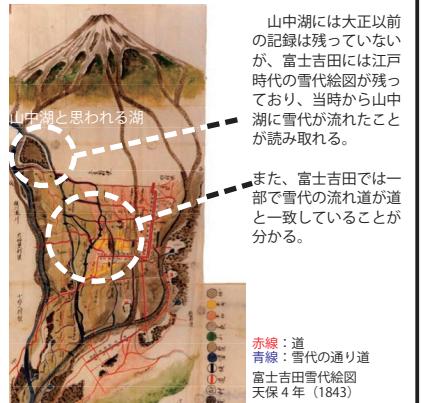


昭和26年の雪代灾害時のたて道37号の様子
山中湖村役場資料より



山中湖村役場資料より山梨日日新聞 昭和52年3月25日

富士吉田における雪代灾害の記録



山中湖には大正以前の記録は残っていないが、富士吉田では江戸時代の雪代絵図が残っており、当時から山中湖に雪代が流れたことが読み取れる。

また、富士吉田では一部で雪代の流れ道が道と一致していることが分かる。

赤線：道
青線：雪代の通り道
富士吉田雪代絵図
天保4年（1833）

生業とたて道

▶生業の変化はたて道の利用主体を変化させた。

(1) たて道に大きく影響を与えた山中地区の生業の変化

山中地区的生業は、何度も転換期を迎えており、たて道の利用に大きく影響を与えた変化としては、米軍兵の駐留、保養所の増加、ドライブイン店舗の増加が挙げられ、これらによって、たて道の利用者や住居の形、家のしつらえ等が変化していることが分かった。以下の(2)から(4)でこれらについて述べる。

(2) 転換期1 米軍駐留期 集落外部者による道の利用

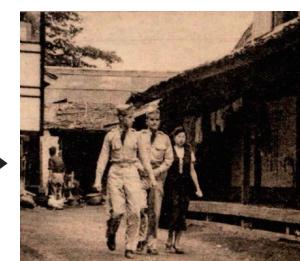


米軍兵が利用したたて道



農村期のたて道42号の様子（高村不二義さん提供）農村期のたて道42号の様子（高村不二義さん提供）

たて道が山中地区に住む人々によって使われていた時代
湖畔道開通以前は、山中地区の人々は湖で洗濯や障子の張替え等を行っており、人々は頻繁に住居と湖畔を行きました。その際、生活道として使われたのがたて道であった。また、「馬入れ道」と言う人もおり、写真からも農道として使われたことが分かる。漁業へ行く道として使ったという話も聞かれた。



米軍駐留期のたて道39号の入口の様子（大森敏郎さん提供）

たて道が外部からの人によっても使われるようになった時代

米軍兵が駐留した昭和30年前後、山中地区では米軍兵を対象とした商店が行われるようになつた。これらの中には湖畔側で経営されたものもあり、そのような場所では、米軍兵がたて道を利用したと考えられる。実際に、たて道で米軍兵が喧嘩をしていたという話を聞かれた。

(3) 転換期 2 保養所経営期 たて道の利用とともにしつらえに大きく影響した保養所経営



利用者の変化

米軍が撤退すると、山中地区では保養所経営が盛んになる。

保養所は左図の黄色で示されており、旧鎌倉往還沿いにも多いため、保養所経営が盛んになると湖畔と保養所を行き来する保養所客が多くたて道を利用したといふ。



建築の変化

保養所経営が盛んになる以前は、住居が旧鎌倉街道に沿って並んでいた。保養所経営が盛んになると、保養所経営をする家はたて道から少し下がり、家を大きくした傾向にある。



しつらえの変化

保養所経営が盛んになると、たて道の人通りが多くなり、生け垣や壁を設ける家もあった。

また、保養所客に対して庭を設ける家も見られた。

これらの壁や庭は現在も残っており、たて道を彩っている。

(4) 転換期 3 ドライブイン店舗経営期 たて道の人の往来の減少

新しいたて道の利用

►スクールゾーン時間帯の抜け道、子どもの通学路



湖畔側と旧鎌倉往還側の人の往来の減少

湖畔道沿いのドライブイン店舗が生業の中心となると、保養所経営が盛んだった時代と比べ、客が集落内に入る機会は少なくなり、たて道を利用する観光客は減少した。



スクールゾーンの制定 とたて道の利用

昭和50年代後半に旧鎌倉往還の一部がスクールゾーンに制定される。その時間帯の旧鎌倉往還の自動車の通行が制限されたため、たて道が湖畔道へ出る抜け道として使われるようになったといふ。

現在のスクールゾーン制定時間は7:30~8:30, 15:00~16:00となっている。

山中地区の子ども達は多くが旧鎌倉往還を通学路としている。



小学生の通学路となっているたて道44号 通学路とし利用されるたて道

たて道44号は、旭日丘方面から山中小学校に通う子ども達の通学路となっている。子ども達はたて道44号で親の迎えの車を待っており、ランセルを道の真ん中に置いて湖畔で遊ぶ子どもの姿も見られた。

周辺に住む人々も小学生の通学路として子どもの安全を気にかけており、村に要請して街灯を取り付けるなどしている。

たて道を構成する要素

►たて道を構成する要素には、長い歴史の中での先人の知恵が込められている。



(1) 石垣



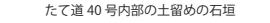
雪代よけの石垣

現在は雪代が集落内を流れることはほとんどないが、雪代が流れた場所では旧鎌倉往還沿いに石垣をしつらえる家が見られる。



土留めの石垣

富士山の麓に当たる山中地区では山から湖に向けて坂となっていたため、多くの家で盛り土をした。たて道内部には現在も土留めの石垣が見られる。



湖水の増水に備える石垣

湖畔道開通以前は、湖水が増水して畑と魚が泳ぐということもあったといふ。当時は湖水の増水に備えて広範囲で湖畔沿いの石垣が見られた。これらは湖畔道開通とともになくなり、現在は残っていない。

(2) 植栽



ケヤキ

山中地区では樹齢数百年と言われるケヤキの木が並んでいる。これは防風林として植えられたものだと考えられ、寒冷な山中湖において、夏の台風等から集落を守り、冬の日照は確保するという先人の知恵が見られる。根が張るケヤキは地盤を強くするとも言われる。



イチイ

イチイの木は山中湖村の木に指定され、イチイの木は火がくると水を噴く」という言い伝えの通り、家や蔵の周りに多く植えられている。写真のように現在はない蔵の存在を今に伝えるイチイがある。

結論

たて道は、

- ・山中集落と雪代の関係
- ・山中地区の集落の拡大の過程
- ・生業の変化
- ・山中地区の人々の生活のあり方

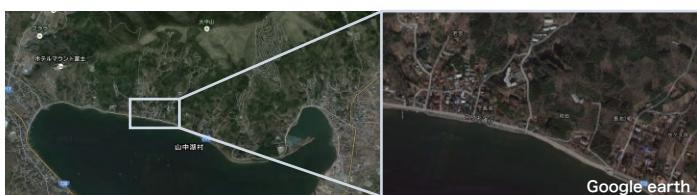
の履歴を現在に伝える道である。同時に、今も昔も沿道に住む人々の生活に最も近い道であり、地区の人々によって大切にされている。

長池地区 長池地区における集落構造の変容過程

- 生業と道に着目して -

東京大学 景観研究室 修士1年 佐井倭裕

時代とともに変化して来た生業と集落構造



長池には平坦な土地が少ないので、火山灰性の農業に適さない土壌であるため、長池地区の人々は、古くより多くの生業に従事する事で生活を営んで来た。そしてその生業は時代に合わせて変化を繰り返し、現在に至っている。この生業の変化に伴って人々とヤマ・ハマとの関わり方が変化し、それらをつなぐ集落の道も変容して来たと考えられる。ヤマ・ハマ、及び外の集落との関わりが重要な長池地区の集落構造を知るためには、それらを繋ぐ道の変容過程を把握する事が重要である。

時代	主な生業
江戸～明治36年	駄賃付け・山稼ぎ・畑作・漁業
明治36年～大正12年	駄賃付け・山稼ぎ・畑作・漁業・養蚕
大正12年～戦前	養蚕・山稼ぎ・畑作・漁業・出稼ぎ
戦後～昭和30年	養蚕・山稼ぎ・畑作・漁業・出稼ぎ・稻作
昭和30年～	観光業（山稼ぎ・畑作・漁業・出稼ぎ・稻作）

特に大きな変化
が起きた時期

(1) 江戸時代～明治36年



「甲斐国全図」
森丈助,
1879.2.20
近藤日本地図叢書
データベースより

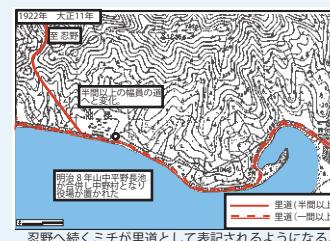
「甲斐国全図」をみると長池から忍野へ向かうミチが描かれている。かつての長池集落にとっては、忍野へ繋がるミチが重要な存在だったと考えられる。

明治時代の公園から、集落の中のミチは実際に現在と同じ構造をしていましたことが分かる。

長池から忍野へ道が伸びている

← 鉄道網の発展

(2) 明治36年～大正12年



駄賃付けの場所が世附山へと移行

馬力が登場し、明治36年に八王子甲府間で中央線が開通すると、駄賃稼ぎの仕事が激減した。そのため、山中村に甲州街道での駄賃付けから追い出された。これを機に相州世附山で木材や炭を積み、駿河小山や藤曲まで届ける駄賃附へと移行する。



駄賃稼ぎが行われていた世附山と届け先の藤曲の位置

(3) 大正12年～戦前



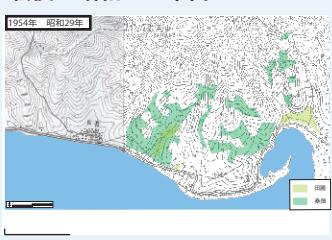
関東大震災と駄賃付けの終わり

関東大震災によって、世附山の馬道が崩れてしまう。後にこの馬道が修復されるが、その頃にはトラックが通るようになるため、駄賃附はこの時代に終わった。

建物の建替えと養蚕業の発展

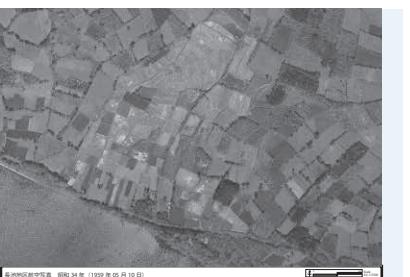
関東大震災で倒壊した建物を、養蚕業に合わせて大きく建替えた。また、寒さに強い桑の導入や、昭和7・8年の繭の値段高騰を背景に、養蚕業が黄金期を迎える。作った繭は製糸工場のあった吉田に売りに行った。やがて、河口湖村から買い付けに来るようになった。

(4) 戦後～昭和30年代



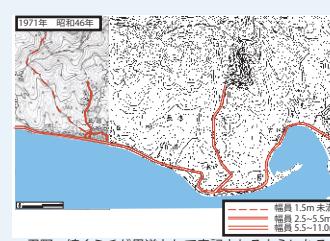
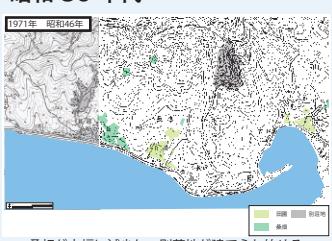
稲作を行うようになる。

戦時中、灯火管制で養蚕が中断したことにより、桑畠が潰されて田圃が広がる。水利組合が昭和28年に設立されるが、平坦な土地が少ないので、田圃を持つ軒数は限られていた。



細割りに作られた田圃 1959年航空写真より

(5) 昭和30年代～



観光業への移行、養蚕の終わり

中国・韓国の生糸生産量、輸出量の増加や、化学繊維の台頭により、日本の生糸の輸出が大幅に減少。長池での養蚕業も衰退し始めた。そこへ寮経営や保養所経営が始まり、長池地区の方々は土地を持っていたため、多くの家庭が田畠を潰して寮や保養所の経営に移行する。共同作業が必要な養蚕や農作業はやがて衰退していった。



田畠だった土地に保養所や寮を建築 1975年航空写真より

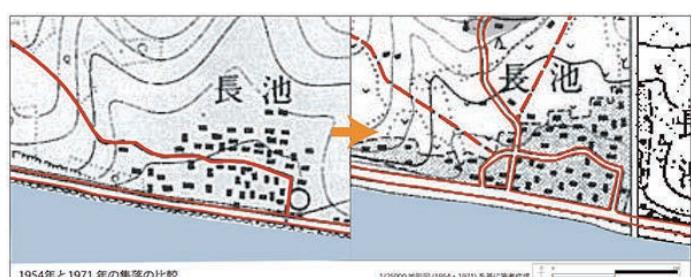
昭和30年代の変容の詳細

(1) 集落と外を繋ぐミチの変化 ▶長池集落と外の集落との繋がり方が変化し、車の利用を前提とした湖畔道路が両者を繋ぐ役割を担うようになった。

道路の舗装・拡張



集落内のミチの変化



(2) 集落内のミチの変化

▶長池集落には昔から多様なミチが存在したが、生業の変化と共に利用頻度や目的が変化した。

土地所有形態とミチのネットワーク



平等に割地された長池の土地所有形態と

長池地区では古くから、各家が背後のヤマにバラバラに土地をもっている。寛文9年の水帳の記載で既に、バラバラに所有していたことが記載されているが、現在の所有形態になったのは、寛延期と化政期の割地の際に決まったとしている。その際、資源に偏りが出ない様に、場所をバラバラに割地して、出来るだけ平等になるようにしたと考えられる。



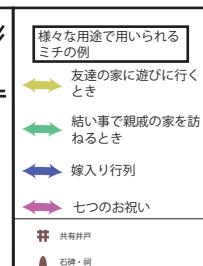
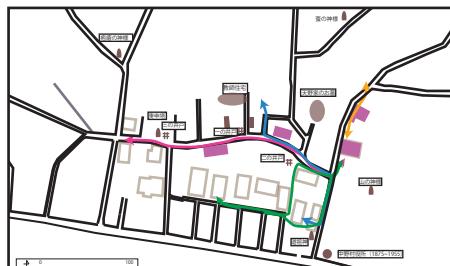
これらバラバラの土地と集落とを結ぶミチは左の図に示すように多数あった。

集落の中の多様なミチ。



ハマへ出る為のたて道

昭和30年代以前は農業や養蚕を行っていたため、農具や養蚕道具を湖畔へ洗いに行く事が頻繁にあった。その際は、集落からハマへ出る為のたて道が利用された。



生活の中で用いられる
集落内の道

農業や養蚕が行われていた頃は、親戚間での結いでの作業が多く、頻繁に家間の移動を行っていた。その際、集落の中のミチが利用された。

また、現在は無いお祭りなどにおいても、重要な役割を果たしたことが分かっている。

ヤマ・ハマの利用の変化に伴うミチの変化



生業が大きく変化 →ヤマ・ハマの利用 方法が変化

養蚕をしなくなったために桑畠が必要なくなり、農作業に馬を用いなくなりたために飼料が必要なくなった。ハマで農具や養蚕道具を洗う事もみられなくなり、代わりにポート貸しや馬貸しにハマ・ヤマを用いるようになった。



使わなくなったミチ
ヤマへ行く機会が減り、これまで用いられて来た農道の多くが使われなくなった。ハマへ出たり、親戚の家へ行き来する回数が変化し、個人の庭とミチが同化する例も見られるようになった。



無くなってしまったミチと新たに造られたミチ



個人の庭と同化した昔のミチ

結論

本研究の成果は

- ・長池集落の生業と生活、集落構造の変容過程、及びそれらの関係性について整理したこと。
- ・他の地域との繋がりや集落内のミチの使われ方などの変化に関する考察から、昭和30年代の生業の変化が、その大きな転換点であったことを明らかにしたこと。